社会学における「批判」と「批評」
ー社会理論の「虚構」的可能性についてー

立教大学　片上平二郎

社会学において、"Critical theory"という言葉は一般的に「批判理論」と翻訳されることが多いが、"critical"という語には「批評的」という意味も備わっている。本報告では、「批判的社会理論」の持つ可能性を、この"critical"という語の「批判」と「批評」という二重性から考えることを行っていきたい。本報告の目的は、「文化」を「批評」的に語るという試みを経由することが、理論社会学の中にどのような視座を新たにつくりだすことができるのかを考察することにある。

テオドール・W・アドルノの思想は、たとえば、その「実証主義」に対する論争的な態度から、「実証」＝「肯定」としての"positivism"に対立するものとして、徹底的に「批判的」＝「否定的」なものとして理解されやすい。だが、同時に、アドルノは「芸術」に対する「批評的」な介入を行い、その新たな可能性を模索することも行っている。アドルノの"Critical theory"とは、「批判」と「批評」の二重の試みを合わせ持ったものとしてある。

アドルノは、「実証」という発想が、自らの予測が的中することを“正しさ”の基準として設定してしまう危うさを持ったものであることを危惧している。そのような「実証」はアドルノの視点から見た場合、現実への介入を回避した「現状肯定」的なものとしてとらえられることとなる。だが、このように考えた場合、アドルノの「社会理論」とは「現実」との適合を重視しない（そして、時に、積極的に回避する）「虚構」的なものであるということになってしまう。本論では、このアドルノの「社会理論」の中にある、ある種の「虚構性」を「文化批評」との関係から考え、むしろその積極的な意義をとらえなおしていく。そして、アドルノが、「社会学」と「文化批評」を同時並行的に行っていたことの意味を考察したい。

「理論社会学」的思考の内部で、「現実」の社会事象とともに、「文学作品」や「芸術作品」、「文化表現」が考察の対象となることは少なくない。そこでは、単に、それらの「表現」を「社会」を反映したものとして「社会分析」のための素材として使用するにとどまらず、「社会」に潜在する諸可能性を抽出するための立脚点としてそれらが分析対象となることもある。「文化」とは、「自律性」を一定程度持った「虚構」的世界が「現実」と一時的に接地する場であり、「批評」とは、その「文化表現」が「現実」との間に持つ内在と超出の運動をとらえる力を持つものである。このような「批評」的要素を持った「理論社会学」的営為をいくつかの例とともに考え、そこで行われていることがどのようなことか、確認していく。

上述のような考察から、「文化表現」に対する「批評」的な思考を経由することによって、「理論社会学」にどのような可能性が生まれうるのか、ということについて考えることが本報告の目的である。それを通じて、“他の社会学のための理論”を提示するという消極的で補助的な意味合いでの「理論社会学」ではなく、“理論を通じて社会学を行う”という積極的な意味合いでの「理論社会学」の可能性を考えていきたい。「理論」というものが、時に「虚構性」を帯びたものであることの“強み”を再考することを行う。